

オンラインで教室での学びを超える

ーアートマイル国際協働学習プロジェクト等を通してー

宮城県宮城野高等学校 教諭 鈴木 幸恵

1 要旨

2022年度、高等学校での「総合的な探究の時間」が始まり、筆者の勤務校では生徒の興味・関心に応じ12系統のゼミナールを開講している。その中で筆者は「国際・語学ゼミナール」を担当し、対面またはオンラインで担当の高校生と海外の高校生との協働学習を進めている。国際化が進み、異なる背景を持つ人々との対話、理解が必要とされる現在、こういった学びはさらに未来に向けて必要とされるだろう。しかし、実際の教育現場では様々な理由により二の次にされることが多い。この研究では、国際化に対して保守的だった勤務校で、生徒が「教室での学びを超える」と感じるような学習を実現した経緯、生徒の変容、教諭間のコミュニケーションの変化について振り返り、今後の展望に繋げたい。

2 研究の背景と目的

1990年代よりインターネットを活用し、世界を基盤にパートナーとなった複数の教室の学習者が協働で学習を進める国際オンライン協働学習(Collaborative Online International learning)が世界に広がっている(山下、2021)。昨今では海外の学校からこういった協働学習の依頼が教育現場に舞い込むなど、現場を取り巻く環境が変わってきていると筆者は感じている。一方で日本人の英語力が世界の中でも低いことが多くの場面で取りざたされる。そのため2018年の高等学校の英語の学習指導要領で「話すこと(やりとり)」と「話すこと(発表)」を含めた5領域を総合的に扱うことが謳われ(文部科学省、2018)、アクティブラーニングの動きも後押しし、授業の主体が生徒に移行してきてはいるものの、日本の高校生が英語を使って何かの活動に取り組み、活動しながら英語力を身に付ける実践例は未だ多いとはいえない現状である。

筆者は十数年に渡り、手紙、ポスター、動画などを使用して自らの教室と海外の教室を繋いで国際交流を促す授業を実践してきた。2019年の新型コロナウイルス感染対策としてZoomやMeetなどのオンライン会議が普及してからは、これらのツールを駆使し、生徒達に生の英語、海外の環境に触れさせたいと考え、自らの海外の友人と協力していくつかオンラインの国際交流の機会を設けた。2022年度からは上記の「国際・語学ゼミナール」で、海外の同世代の高校生と一年に渡りSDGsについて議論を深め、議論から生まれたイメージを元に壁画を協働で作成する「アートマイル国際協働学習プロジェクト」に挑戦し、2022年度より今年度に至るまでパキスタン、インドネシア、サウジアラビアとの協働学習に取り組んでいる。2023年度は最も優秀な活動をした学校に贈られる「外務大臣賞」を受賞することができたが、そこに至るまでは校内で国際交流活動に関する合意が得られない、生徒がなかなか自分事として活動に取り組めないなど乗り越えるべき様々な壁があった。この研究は、今回の筆者の経験を整理することで、現在現場で国際的な活動を取り入れることに二の足を踏んでいる先生方へのヒントを提供することを目的としている。

3 国際協働学習の実践と生徒の反応

筆者はゼミナールが開設された 2022 年度より主に上述したアートマイル国際協働学習プロジェクトに主に取り組んでいるが、ここでは初年度のパキスタン、翌年度のインドネシアとの協働学習の実践について以下の表を用いて比較する。この協働学習において、日本側の活動は主に数人のグループ活動で進めている。また、表の中にある「論点」は、2022 年度は「日本で既に進んでいる点、進められていない点、その解決策」、2023 年度は「相手と共に深めたい疑問、提案」を表す。

表 1 2022 年度と 2023 年度の協働学習の比較

年度 国	2022 年度 パキスタン	2023 年度 インドネシア
相手校	Modernage Public Girls School	SMA Saint Paulus Pontianak H.S.
参加者	日本 32 名 相手 14 名	日本 39 名 相手 25 名
SDGs	Goal 11 住み続けられる街づくりを Goal 13 海の豊かさを守ろう Goal 14 陸の豊かさを守ろう	Goal 4 安全な水とトイレを世界中に Goal 9 産業と技術発展も基盤を作ろう
論点絞り	KJ 法で 3 点を絞る	マインドマップで 1～3 点上げる
使用ツール	スライド、Zoom	スライド、動画、Zoom
SDGs と壁画に関するやりとり	計 2 段階 ・双方から論点に関するプレゼンテーションと質疑応答 ・壁画に関する合意を得るための提案 ・(最後、完成した壁画について共有する Zoom を実施できなかった。)	計 6 段階 ・論点の行き来 (プレゼンと質疑応答を含む) 3 段階 ・壁画に関する意見交換 2 段階 ・Zoom で双方から完成した壁画に関するプレゼンテーションと質疑応答 1 段階
やりとりの様子	・日本からの質問は出なかった。相手からの質問には教師が答えた。 ・どのように壁画の半分ずつを担当するか、各々の場所に何を描くかとテーマカラーを決めた。それ以外は相談せず其々で作成し報告し合った。	・日本からの質問が徐々に出て、必要に応じて教師が援助した。 ・どのように壁画の半分ずつを担当するか、各々の場所に何を描くかの詳細、目指す絵の雰囲気等も議論し合う。
生徒の変容	・班の中での協力 ・初めてのオンライン学習による期待と緊張感の中、挑戦する姿勢 ・壁画作成の際のリーダーシップ、協力	・発言、質疑応答する力 ・リーダーシップ、挑戦する姿勢 ・得意分野での活躍、チームワーク ・積極性の向上
生徒の感想	・世界諸英語への気づき ・世界への関心 ・自らの英語力、前向きな悔しさ	・やりとりが出来たことの嬉しさ ・伝えるための工夫 ・発言する喜び
問題点とその対処 (太字)	・頻繁な停電 ・相手教師の不在 ・英語の訛りと速さ	・相手教師の多忙さ ・急な Zoom キャンセル→動画投稿で代用 ・英語の訛り、スピード

<p>→ロイロノートでクイズにして何度も楽しんで聞けるように工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・双方のペースの差と、意向が伝わりにくい難しさ（最後の完成した壁画の共有に双方の生徒同士話す機会が取れなかった。等） 	<p>→1年生が聴衆になりフィードバック 非言語的コミュニケーションの活用 伝える内容と手段の調整</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一方的になりがちなプレゼン <p>→双方向の議論になるように論点の流れの表をインドネシアと共有</p>
---	--

初年度は急な都合で相手の担当教師が不在になり予定が立てられなかったこともあり、スケジュールに合わせて日本側の高校生を支援するのがやっとで、最後に完成した壁画について共有し合う時間も相手の都合で実施することが出来なかった。しかし、日本の高校生の反応は非常に豊かで、「『教室を越えて思いっきり自分を表現することが楽しい!』」と思える新しい自分に出会った。」と初めてのオンラインでの協働学習に新たな可能性を見出した生徒もいた。二年目は初年度に一年生としてこの学習を経験した生徒達がより力を発揮し、相手の教師と高校生が熱心に取り組んでくれたこともあり、双方の英語力に大きな差があったものの上述した工夫を重ね、細かい点まで議論できた。日本とインドネシアの高校生の双方に実施した自己評価では、積極性や批判的思考など多くの面で自らの成長を自覚していることが伺えた。

4 実践までの筆者の経験

これより上記の実践に至るまでの筆者の経験を、以下の表にまとめ振り返っていく。

表2 アートマイル国際協働学習プロジェクト実践までの筆者の経験

時期	筆者の実践内容	現場での動き	筆者自身の気づき
2010	手紙、ポスター等で日本の高校生とカナダの日本語学習者間で互いの目標言語で交流		・相手の存在、目標言語としての日本語が動機付けになる
2011	日本語学習者（英語ノンネイティブ）を講師として迎え、日本の高校生と互いの目標言語で発表		・世界諸英語への気づき ・ノンネイティブとしての自覚
2012	震災後、海外の支援者（元 ALT）の想いを知る		・想いを理解しようとする姿勢
2020		本校初の海外研修コロナで中止	
2021	カナダ人（英語使用）、中国人（日本語中国語使用）友人と希望生徒とのオンライン交流	英語キャンプ構想	・伝わるかどうかの高揚感 ・やさしい日本語への意識
2022	台湾からの交流依頼 パキスタンとのアートマイル国際協働学習	ゼミナール開始	・世界諸英語への気づき ・生徒自身の英語力への気づき
	国際化への反対	本校初の海外研修	・世界への関心
2023	インドネシアとのアートマイル国際協働学習 台湾オンライン・対面交流	国際交流を特色に	・やり取りが出来た嬉しさ ・流暢性の差
2024	サウジアラビアとのアートマイル国際協働学習 インドネシアとの教科横断授業の予定	海外研修予定	・国際協働学習 2 年目に取り組む生徒の逞しさ ・同僚のサポート、前向きさ

筆者は前任校では様々な形態の国際交流を自らの教室の中で展開していた。しかし 2014 年の転勤先である現在の勤務校では、主だった国際交流の素地はなく、2020 年に初めての海外研修が企画されたが新型コロナウイルスの影響により中止となった。翌年、筆者は校内で実施できる英語キャンプを企画したが、その中で 2022 年からのゼミナールの話が持ち上がり、そちらに舵を切ることとなった。その年、台湾からの交流依頼が舞い込み、関係部署で話し合われたが、多忙さ等による反対が強く、話し合いの末、台湾との交流は国際・語学ゼミで実施することになった。これにより本ゼミではアートマイル国際協働学習、台湾とのオンライン交流、探究活動の三本柱で運営することになった。また、2022 年度には勤務校で初めての海外研修が実施され、現在は 2024 年度の実施に向けて企画している段階である。

この経緯を振り返ってみると、2022 年度の「総合的な探究の時間」の実施により、それまでの経験を活かし、新しい挑戦をする好機を得た。国際交流に関して反対意見があったが、それによって「日常的に学んでいる英語を実際に海外の人々とのやりとりとして使い、世界を感じさせる機会を作りたい。」という自らの思いを再確認し、実践への原動力とすることが出来た。また生徒の活動をアピールすることでモチベーションの高い生徒が本ゼミに集まり、スムーズな運営が可能になった。

5 まとめ

筆者は普段から研究授業、日常の授業やオンラインの交流を試す場面を同僚に見て貰えるように案内し、「生徒が実際に英語を試す場、世界を感じられる場が必要だ。」という声を上げ続けてきた。また、生徒の活躍が国内外のメディアに報道されることで、学校内外で賛同する存在が明確になり学校の特色として打ち出す体勢が整ってきた。同僚達の間には、もっと生徒達の力を信じてみようという声、領域横断の授業の可能性の模索、それに賛同する声など、新しいものに挑戦してみようという空気が生まれていると感じる。ある生徒が、教室での学びを超え、それを面白いと感じる新しい自分を知ってはっとしたように、背景の異なる人同士が繋がることで生まれる生徒の達成感、自己肯定感を高め、同世代の高校生から直接現地の問題を見聞きしたり、一緒に考えたりすることで、生徒が自らも未来の世界を担う一員だと意識できる学習を追求し、提供していきたい。

6 参考文献

文部科学省 (2023) 『今、求められる力を高める総合的な学習 (探究) の時間 未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた 探究の充実とカリキュラム・マネジメントの実現 高等学編』

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230531-mxt_kyouiku_soutantebiki03_2.pdf

山下美樹 (2021) 「オンライン国際連携学習 (COIL) の実践と考察: 海外パートナー校の大学院生による学習支援」『麗澤大学紀要』 第 104 巻, 105-111.

Japan Art Mile (2023). 『未来を拓く次世代育成アートマイル国際協働学習 JAPAN ART MILE』

<http://artmile.jp/activity/iime/aboutartmile/>

謝辞

ジャパンアートの塩飽理事長、副理事長、担当のヘイル様には、経験に基づく多くの助言を頂き、厳しい環境の中、実践をここまで成長させられたことに心より感謝申し上げます。